

---

# ヴィーヴァ・ハルケギニア

豆腐屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴィーヴァ・ハルケギニア

### 【Nコード】

N9772P

### 【作者名】

豆腐屋

### 【あらすじ】

現代の欧州とハルケギニアが入れ替わったらどうなるのでしょうか？

今年の1月1日にその事件が起こったと仮定してその後の歴史をなぞってみましょう。

作者は政治経済の専門家ではありませんので考証がかなり浅いですがそこは勘弁してください。

注意：ハルケギニアの地図は現代欧州に準拠します。

## 2011年1月1日～9日 転移

2011年1月1日

この日、変化は唐突に起こった。

欧州との通信が突如として途絶したのだ。こちら側から電波を送っても行くばかりになり、帰ってくる事は無かった。さらに海底敷設ケーブルもどうやら途中で途切れてしまっているようだった。この事態に、欧州にサーバーがあるネットワークシステムは軒並み休止状態に追い込まれた。

また、情報を第一とする金融市場や株式市場などが混乱し、欧州との取引が即座に停止された。

欧州に大量に資産を持っていた人々は途方に暮れてしまった。

まず、諸国は最悪の想定―世界規模での核兵器によるEMP攻撃―を疑った。

しかし欧州以外の国と通信が取れている事が確認され、さらにレーダーにも高高度を飛ぶ弾道ミサイルなどの物体は確認されなかったため、安堵した。

しかしながら、欧州だけがネットワークの海からすっぱりと消えてしまった事には変わりなく、

全世界のマスコミがこの事態にこぞって緊急特番を組み、欧州との通信不全を報道した。

高度にネットワーク化した社会で瞬時に様々な憶測が飛び交い、欧州を対象に核兵器を使用した新たなテロかと全世界の人々は恐怖した。

だが、アメリカなど欧州に衛星を持つ国は、核兵器による攻撃を疑問視していた。

何故ならもし本当に高高度核爆発のよるEMP攻撃が起こったなら、その上空にある人工衛星にも強烈な打撃を被るはずだからだ。しか

し、これらの衛星は現在も正常に稼働している。さらに言えばそこから観測される欧州の大地も平穏そのものだった。

・・・それまでと比べて不自然なまでに縮小した都市、拡大した森林、さらに宙に浮くブリテン島が無かったのなら。

2011年1月2日

アメリカは衛星から欧州の第6艦隊がイタリア、ガエータの根拠地ごと消え去っているのを確認。

この緊急事態に欧州の状況確認も含め、ノーフォークの空母群を含む第2艦隊を欧州に急派した。

さらに地続きのロシアは欧州方面の天然ガスのパイプラインがベラルーシ・ウクライナ・ポーランド国境で寸断されている事を確認。この事態に混乱する両国にゴリ押ししてモスクワ軍管区陸軍部隊のヨーロッパ派遣を決定。アメリカはそれどころではないのかこれを黙認。

また、今回の欧州通信途絶で金融危機から持ち直してきた世界経済に恐慌が発生。  
後に「欧州ショック」とも呼ばれる。

2011年1月4日

衛星で再取得した欧州の画像から、アメリカ航空宇宙局（NASA）は一つの報告を行った。

我々の良く知る欧州は消滅し、中世・近世的な文明を持った別の何かに置き換わっている――

突拍子もないこの結論は、しかしそう考えると今までの状況と全て辻褄が合った。

突如とした通信の途絶、寸断された海底ケーブルとパイプライン、消えた艦隊・・・

さらに衛星から取得されたヨーロッパ半島の街並みを見ればそう考  
えるしかなかった。

街は全て石造りらしい建物で出来ている。それは城を中心とした  
城壁らしきもので囲まれており、  
まるで城壁の外には敵が居るかのよう外側には一切街並みが建て  
られていない。

もつと高解像度で見れば道路は石造りか土をそのまま踏み固められ  
たものしかなく、

欧州を連合たらしめていたアウトバーンや高速鉄道の軌条は何処に  
もない。その道を時折通るやけに速度の遅い車らしきものは馬車で  
ある事が確認された。

しかも例のブリテン島らしき浮遊大陸ではなんと剣と槍、そして矢  
や初期の銃を用いた戦争が行われていた。

そして驚くべき事にファンタジー世界の生きものと思われていた竜  
が空を飛んでいた。

これを知ったアメリカ上層部は、最初何かの悪い冗談としか思え  
なかった。

史実の中世との相違点は、浮遊ブリテン島と、別の赤外線カメラ  
で撮影した画像で判明した中世の時代で使われたエネルギーより明  
らかに大きいエネルギーが日常的に使われている事だった。

何としても明らかに膨大なエネルギーが必要な、島を丸ごと浮遊さ  
せている現象の解明と明らかに大きいエネルギーの源を特定し、自  
国のモノとしなければならぬのは明らかだった。

2011年1月5日

国連安全保障理事会が緊急招集。

欧州の現状を把握し情報を共有し、これからどうするか協議する

ため。

常任理事国のフランス、イギリスが欠席のまま開始された。

ここでアメリカは諸外国の求めに抗しきれず、情報を開示した。浮遊島とエネルギーの事は上手くはぐらかした上で。

しかしそれだけでも報告をアメリカから聞かされた理事国は最初に知ったアメリカ上層部と同じ顔をした。

アメリカの陰謀ではないかと疑った国も多かったが、裏付けのある資料から欧州が何か別のものと置き換わった事を認めざるを得なかった。

まだ欧州の状況が不透明であるとして国連軍こそ組織されなかったものの、共同で欧州の調査を行う事が決議され、国際調査隊が派遣される事に決定。さらに先のアメリカ、ロシア両国の軍隊派遣が追認された。欧州が本当に消滅したのなら今ヨーロッパ半島を占拠している勢力から利益を得なければならない。

また、この機に乗じてブラジル、インド、日本が常任理事国入りを求めたが状況調査中という事で否決された。しかしもし本当にイギリス、フランスが消滅したならばこの穴を何らかの形で埋めなければならぬ事は確実だった。

2011年1月6日

おぼろげながら状況が明らかになってきた事で、世界中の人々にパニックが拡がり始める。

極度に情報化された社会の弊害であった。

特に欧州との貿易関係の状況は深刻であり、輸出入先が消滅した事により工場の稼働率が低下。原材料を欧州に輸出していた国も軒並み打撃を受け、欧州の資産が消滅した事を知った資産家は保険も降りないため頭を抱えた。投身自殺したものも少なからずいた。

また石油の消費地の消滅が判明した事で石油の価格が暴落、世界経済に先の「欧州ショック」の追い打ちを与える形となった。諸国は緊急予算を組み支出を増やすが焼け石に水だった。

中国が先の国際調査隊の他に独自の調査隊を派遣する事を表明。これは「調査隊」と銘打っているが明らかに軍隊であった。空白地帯となった欧州の利益をアメリカ、ロシアに先を越されないようにするためと思われる。

しかも中近世の軍隊なら現代の軍隊が受ける打撃は皆無に等しい。アメリカ、ロシア両国はこれを強く非難。

2011年1月9日

先に派遣されたアメリカの第2艦隊がヨーロッパ、旧フランス領域に到着。

まだ完全に消滅したと決まった訳ではない第6艦隊の搜索とヨーロッパ半島や宙に浮いたブリテン島の調査（と自国の利益確定）のための艦隊の根拠地を置くため、現地勢力との交渉をする事を決定。示威効果を考え敵首都と思われるフランス領域最大の都市（奇しくもそれはパリと同じ位置にあった）に面前上陸して交渉を開始する事とした。要は現代の黒船であった。

この決定は、自分達の中世・近世時代を照らし合わせ、彼らには領海概念が薄いだろう事、またいきなり襲いかかってくるほど野蛮な文明ではないだろうという憶測が働いた、少なからず博打の要素があったものであったが、ロシアや中国が既にヨーロッパの利益を確保しようと動いているため、アメリカはここで無駄な時間を浪費したくなかった。

アメリカの目的としては、出来るだけ早く他国に先んじられる前に自分の勢力圏を確定しておきたいというものがあつた。

このために、急きよ戦闘機で外交官や歴史家が艦隊に急派される

事となった。

結果として、アメリカはこの交渉でゴリ押しで現地勢力にアメリカ艦隊の施設使用権を認めさせた。

空母を首都の面前に停泊させ、戦闘機による示威行動を行った事が決め手となった。

こう言うとスムーズに交渉が進んだように感じられるが実際はお互いの言語に四苦八苦しなにかという感じだった。ハルケギニア語がフランス語やドイツ語、そして英語に似ていた事が幸いした。

この交渉で以下の結果が得られた。

1・この欧州領域は彼らには「ハルケギニア」と呼ばれている。

また、アメリカが艦隊を派遣したスペイン・フランスの位置にある国は「ガリア」と呼ばれる国であり、他にはオランダ・ベルギーの位置にある「トリステイン」、ドイツ・ポーランドの位置にある「ゲルマニア帝国」、イタリア・バルカン半島の位置にある「ロマリア連合皇国」、そして例の浮遊ブリテン島には「アルビオン」と呼ばれる国家がある事が判明した。

また、ここはガリアの首都「リュティス」であるらしい事が解った。

2・「ガリア」では貴族の権力が強く、王の直轄領や常備軍は数えるほどしかない封建制度である。

3・宗教面ではブリミル教と呼ばれる宗教が支配的であり、教皇が王に正統性を与える王権神授が行われている。

4・ハルケギニアには魔法が存在する。

特に4は衝撃的な内容であった。魔法には四系統があり、火・水・風・土からなっていた。また失われた系統と言うものが一つあると

いう話だった。話を聞いても全く信じなかったアメリカ外交官が実際にガリア貴族が火を杖から発生させると驚いて腰を抜かしてしまったと言われている。

島が空に浮いている時点である程度予測していたものの、アメリカはこの未知の体系に驚愕し、これを手にするべくあらゆる手段を使う事となる。

2011年1月1日～9日 転移（後書き）

この先こんな感じで年号の羅列が続いていくので気に入らない方は閉じる事をお勧めします。

2011年1月10日～15日 接触

2011年1月10日

アメリカ第2艦隊空母群の戦闘機がアルビオン上空を偵察。  
木造の帆船が宙に浮いているのを視認。

2011年1月12日

ロシアの陸軍部隊がゲルマニア国境を突破。

先のアメリカの交渉成功に焦ったのかほぼ最大速度で西へと前進を開始。

もちろん途中で敵対してきた勢力は全て現代の銃火器や戦闘機、戦車などで殲滅したうえで。

ロシア曰く、「もちろん警告は行い、全て人道的に対処した。しかしながら欧州は今どの国家の主権も及んでいない空白地帯であり、現地住民を早急に保護する事は我が国の義務である。」

ミサイルで城壁を吹き飛ばす事を警告と、歯向かってきた騎士を全てアウトレンジで射殺する事を人道的と言うなら、であるが。

ここでロシアもアメリカより実戦的な形で魔法の存在を知るようになる。

現地軍曰く、火の玉が仲間を燃やした、氷の矢がフロントガラスを突き破って運転手を殺した、突然のかまいたちで喉をかつ切られた、巨大な土人形が小隊員を踏みつぶした・・・

この予想外の損害にロシアの攻勢は一時停止する事となる。

締め上げて吐かせた領主の口から「魔法」が存在するとは聞いていたが中世的な迷信だとして全く信じていなかったロシア上層部にとつては青天の霹靂であった。

連邦保安庁（FSB）からアメリカが何らかの重要機密を握って

いる事は報告されていたのだがまさか魔法が実在していたというのか・・・！？

火を生みだし水を創り出し風を起こし土を操る。空を飛び物体を宙に浮かせる。

この現象を現代科学で解析することが出来れば必ず強いロシアは蘇り世界に覇を唱える事が出来るだろう。

そのためにはアメリカに先んじられる事があってはならない。

幸い現地武装勢力の魔法は全体で1割ほどしか使える人間が居ないようだし、損害も微々たるものだ。

魔法が使える人間を「拉致」してでも研究する必要があるだろう。

こうしてゲルマニア貴族達は彼らが知らない内に死刑宣告を出される事となった。

ただし、それ以外の一般平民に関しては基本的にロシアは手を出す事はなかった。

いくらか制限しているとはいえロシアにもマスコミというものは存在していたし何処にアメリカの目が潜んでいるわからないからだ。

一応は「調査・住民保護」の名目で軍を派遣しているのだから非武装の住民を殺してしまつては何を言われるか解らない。

どうあれ、現在の北熊がソビエト連邦でなかった事はゲルマニア平民にとっては不幸中の幸いだったのかもしれない。

もしソ連だったなら住民すらも根絶やしにしてあらゆる物品を略奪していくだろうから。

また、齒向かって捕虜にされた封建領主の「証言」によるとゲルマニア帝国は国と言うよりは中世の神聖ローマ帝国のような、領主

たちの寄り合い所帯らしきものらしい。

「警告」しただけで降伏した領主が多かったのはそれも一因にあるのだろう。

これからもこの進撃が続くかどうかは解らない。

彼らはドラゴンで既に彼らの皇帝に報告しているだろうし、ゲルマニアの首都に近づく毎に皇帝の影響力が強い土地が増えていくだろう。

しかしロシアは全く心配していなかった。圧倒的な技術差が一方的な戦況を生む事は、湾岸戦争やイラク戦争で自分達の造った兵器がいつも容易くアメリカに破壊されるのを見て体験済みだったからだ。

2011年1月13日

ガリア国内で反乱の兆し。

ガリアと平民の国アメリカの間で結ばれた屈辱的な取り決めに対する王家への反発。

これには旧来の後継ぎ問題に起因するオルレアン派とジョゼフ派の対立が根底にある模様。

先の取り決めに結ぶ時もガリア王ジョゼフの側近は国内で広く話し合った方がいいと諫言したのだが、

彼は突如出現したアメリカの力を利用し不穏分子の一掃を図る事にしたようだった。

アメリカとしては両派を支援し分断統治するという選択支もあったが、ハルケギニアでの橋頭堡を確保する狙いからガリア王ジョゼフを支援する事に決定。

ジョゼフは危険人物であると中央情報局（CIA）からの指摘を受

けていたのだがジョゼフは魔法技術の供与をちらつかせた上、アメリカ式民主主義や資本主義、近代化に理解を示したため上層部はこれを黙殺。

国内外には「ガリア王国は民主主義への過渡期にあり、これを支援する事はアメリカの神聖なる義務である。この未熟な国家を転覆せんとする敵がガリア内部で蠢動している以上、アメリカはこれを撃滅しなければならない」と喧伝。ジョゼフ支援に本腰を入れる。

このためにアフガニスタンの軍を順次引き上げハルケギニア方面へと投入していく方針。

ロシア、中国はアメリカ帝国主義だとして非難。

このころ全世界のマスコミが取材のためハルケギニア入りをするようになる。

渡航規制が解除された訳では無かったが、全てを監視できるはずもなく次々と現地に入る者が続出した。

中には現地の領主の兵にカメラを武器と勘違いされ取り上げられるケースや、そのまま殺されてしまうものもいた。

山賊に強盗されるのなどはまだ良い方であった。酷い時はプリミル教の異端審問で拷問を受けながら死んだ者もいた。現在のヨーロッパ半島は現代人にとっては紛争地域並の危険地帯であった。

しかしながらその中でも運がいい者の手により、ハルケギニアの現状が次々と報道された。

みずばらしい村々や甲冑を着た兵士。明らかに栄養失調な子供たち。中には貴族による無礼打ちなどもカメラに収められていた。これが今のヨーロッパの現実かと世界中の人々は息を飲んだ。と同時に自分達が安全圏に居る事を確認して人々は安堵した。

そういった余裕の中でハルケギニアに対する人道支援の声が高まっていくのはある意味必然だったかもしれない。

様々なNPO団体が組織され、がぜんハルケギニアに対する注目が

集まっていた。

国家もこの流れには逆らえず、今までのような無茶は出来ないようになっていくと同時にヨーロッパ半島介入への口実を強化する事に利用していた。

2011年1月15日

米ガ首脳会談。

危険を推してアメリカ合衆国大統領バラク・オバマとガリア王ジョゼフの会談が行われた。

この会談はオバマ大統領が直接ガリアに専用機で出向く形でリュテイスのヴェルサルテイル宮殿で行われた。

また、この会談の様子はマスコミを通して全世界に通して行われ人々は初のハルケギニア国家と地球国家の首脳会談を固唾を飲んで見守った。

ジョゼフ王はマスコミなど全くないハルケギニア国家の王とは思えぬほどのカメラ慣れを見せ、にこやかにオバマ大統領と握手をした。ここで両者は現在のお互いの情勢に対する認識を確認、いくつかの懸案事項（ロシアのゲルマニア国境突破、ガリア国内の不穏分子の問題、和親並びに通商、安全保障条約締結の確認ほか）について話し合われ、両国の親密さをアピールした。

ここでジョゼフは国内の問題が片付けば立憲民主制の受け入れや技術交換、自由交易などの可能性について示唆、アメリカ大統領からガリアに対して万全の支援を約束する旨の言質を獲得した。

なお、この時ジョゼフ王は民主主義や科学技術の導入に殊の他熱心であったと伝えられている。

2011年1月16日～21日 思惑（前書き）

遅くなつてしまいすみません。

1月、2月は予定が詰まっているため余り更新できないと思います。

2011年1月16日～21日 思惑

2011年1月16日

アメリカ、ロシアの行動 - 強圧的な住民保護 - を強く非難。

名指しで「まるで侵略行為である」とも言っただけを見た。これは、非難するという行為のほかに、アメリカがゲルマニアを国家として認めたという事でもあった。

アメリカがゲルマニアを武装勢力ではなく国家として認めたのなら世界中の国はそれを認めざるを得ない。結局、ゲルマニアを国家として承認しなかったのはロシアが圧力を掛ける事が出来たルーシ系国家くらいのものでしかなかった。

これをもってロシアのゲルマニア侵攻は世界から「侵略」として認められたのであった。もっとも、それで止まるようなロシアでは無かったが。

2011年1月18日

ヴィンドボナ攻囲。

ゲルマニア皇帝、アルブレヒト？世は眼前の光景を信じる事が出来なかった。

ほんの5日程前に東方辺境領の一つから「東より敵来たる」との報告を受けたばかりだった。

有史以来東方から侵略勢力が来るなどという事は一度も無かったため、皇帝アルブレヒト？世はこれを重く見てゲルマニア全土に軍の編成を急がせたのだが、その報告が東方辺境領から中部領、さらにヴィンドボナ近郊領と短期間で迫ってくるにつれ、皇帝の顔色はかなり悪いものとなっていた。常識では考えられない機動速度…これが単に騎兵戦力を集めた斥候だというのなら理解できるが、その報告の量とその後の音信途絶から判断すれば大軍の機動であることは

明白であつた。そのためこの5日間でヴィンドボナに集める事の出来た戦力は皇帝親衛隊に加えてヴィンドボナ近郊から無理やり引張ってきた徴兵軍・少数の騎士とただの農民・とヴィンドボナにいた運の悪い傭兵の3000にも満たない兵力でしかなかった。

一般的にハルケギニアの軍の編成はまず軍を編制するという勅命を国王が出し、各封建諸侯がそれを受け騎士に農民を集めさせこれを訓練し、練成した軍を国王のもとへ送ることから成る。そのため各小隊が何人武器がどれというような規定などもろくなかつたし（領地の収穫高からある程度は見積もられていたが）、その編成速度は非常に遅いものであつた。常備軍も無い世界である。どれだけ頑張つた所で各地の諸侯から帝都に軍が送られてくるには最低1カ月は必要なのであつた。ましてや5日で軍を集めるなどどだい無理な話だつたし、アルブレヒト？世もこのような想定は全くしていなかつた。そしてハルケギニアの軍事常識から言えばゲルマニア東方辺境領から帝都ヴィンドボナまで大軍が5日間で機動するなどと言う事はあるはずのない事だつたのだ。

しかしこの光景はいつたい何なのだ。実際に敵の大軍は眼前にあり、天幕の他に何か穴を掘っているのが見える。馬なし馬車はその周囲を固め高速でひっきりなしに動いている。攻囲前に挑んだ絶望的な野戦は敵に全く損害を与えることなく終了し、ヴィンドボナ周囲の農地には我が方の死体が転がるのみ。時折送られている魔法で拡声されたかのような声は全く理解できないがどうせ降伏勧告に決まっている。

大本営は本来いるべき諸侯の3分の1もおらず、夢想じみた攻撃論と現実的な降伏論を延々と戦わせている。これらを調停するのは皇帝の役目だ。

常識で考えれば降伏すべきだ。幸いこちらに降伏勧告しているのを見るに話の通じない輩では無いのは確かだし、敵には圧倒的な技術力と物量があり、既にここまで侵攻されているのだ。さらに今ま

での報告を見るに敵は行政府たる城をピンポイントに狙ってきており街を焼いたという報告は無かったので、こちらを絶滅させるまで戦うという考えはないようである。

ガリアがこちらを支援すると寄越しているがそんなものが今更何になるのか。聞けば向こうにも「外部勢力」がバツクに付いたようだがこの眼前の脅威を目の当たりにしてそんな実際に見た事のないものを当てにする事は出来ない。

またトリステインが錯誤にも婚姻の話などの連絡を寄越しているが知った事か。こんな状態では始祖の血や自身の勢力圏などと言っている場合ではない。  
やはり降伏すべきか…。

そこまで考えるとアルブレヒト？世は不意に聞こえたけたましい音に現実に戻った。敵の攻撃か？ついに我が人生も終わりか…。

城内が騒がしくなる。連発銃の音が響き渡る。思えば野戦で我方の騎士を蜂の巣にしたのもこの銃声であった。そうしているうちに大本営の重厚な扉が大きな音を立てて乱暴に開けられた。

「誰か！」

誰何の声を上げながら振り向くとそこには信じられない人物が居た。

「我はガリア王ジョゼフ！アルブレヒト？世、貴殿を救出に参った！」

この日、アメリカ軍はロシア軍の攻囲下にあつたヴィンドボナからゲルマニア皇帝、アルブレヒト？世の救出に成功する。これはロシアのこれ以上の侵攻は許さないというメッセージであると共にアルブレヒト？世というカードをアメリカが欲したが故であつた。ア

メリカ・ガリアはゲルマニア救出の名の元に残る西方ゲルマニア領に兵を派遣できるのだ（流石にロシアとガチでやりあうつもりはアメリカにも無かった）。ロシア政府は抗議したがアメリカはこれ以上の侵略は断固として許さないとしてロシアにこれ以上西に進出しないようにと釘を刺した。ロシアは現状手に入れた領土で満足しなければならぬと共に嘘でも正統性を主張するために無理やり現地民の長を決めるしかなかった。

これ以降、ゲルマニアはヴィンドボナを境にアメリカ・ガリアの影響力の強い西ゲルマニアとロシアの影響力の強い東ゲルマニアに分割される事となる。

なお、この救出作戦で無理やり付いてきたジョゼフの安全を確保するためにアメリカ軍は通常より多めに兵力を派遣せざるを得なかった。アメリカ軍をゲルマニアが敵と誤認する可能性があると言われれば断りにくい。ジョゼフ王は初めて乗るヘリコプターに機内ではしゃいでいたという。

2011年1月19日

この日、ガリア北部軍港サン・マロンでは隣国ゲルマニアの騒乱とは対照的に深く静まり返っていた。

少し欠けた満月に照らされた港内はおよそ現代の感覚の軍港ではなく、城壁に囲まれた海に面した城砦に木のドックや棧橋が数個とそれに係留された木造の軍艦・戦列艦やコルベットなど、さらに陸地に木箱が積み上げられており、ベトンで固められたブンカーや金属製ガントリークレーン、巨大なコンテナなどは一切見当たらない（最近アメリカ海軍軍艦を受け入れるためそれらが整備され始めてはいる）。

これらのガリア両用艦隊は近々西ゲルマニアに派遣される事になっているので昼はその準備で凄まじい喧騒の只中であつたが、今は

夜という事もあり夜の帳の静寂に包まれている。

艦隊のひしめき合う水面は電灯などの照明が存在しない事も相まって何か人間の根源的な恐怖を呼び醒ます暗闇に支配されていたが、その水面のある一角に突如として異変が起こった。

静かな波がゆらめいていた水面が突然盛り上がり、その只中から水面と同様に黒い物体がせり上がってきた。

その物体の外壁は金属特有の光沢で月の光を反射しながら海の中から徐々にその姿を露わにした。

それはおよそこの全木造の軍港に似合わぬ全金属のボディを持っていた。

ロサンゼルス級原子力潜水艦ダラス。

それがこの物体の正式名称であった。

ダラスは手近な棧橋にその船体を係留するとちょうど大量の木箱と共に棧橋で待機していたアメリカ現地派遣員から船員総出で木箱を艦内へ詰め、さらに一緒に居たガリア側随員を受け入れるとすぐに海中へと姿を消した。

さて、この木箱の中身であるが輪切りにしてみると木箱である事は偽装である事が分かる。

その内側には厳重な放射線処理を施した金属製ケースが入っており、さらにその内側には「何の変哲もない」石ころが入っていた。しかしながら、この石ころはアメリカ、ひいては現代社会に途轍もない革命をもたらすものであるかも知れなかった。

そのため、機密性を重視し、わざわざここまでの偽装をして原潜まで派遣してこれをガリアから回収したのだ。

ちなみに、これの対価はガリアに対する科学技術供与であった。対価としてはかなり安いものであった。何しろ、彼らはパルス信号

どころか交流電源の存在、信じがたい事にフレミングの諸法則すらも知らないのだ。アメリカから派遣された技術者がそれを教える光景は、まるでエレメンタリースクールの生意気なガキが理科の時間の実験ではしゃぐようなものであったという。

こうまでして、言うにはあまりにも簡単すぎるが、この石をアメリカが欲したのは、これが謎の斥力を生みだし物体を宙に浮かす力を持つ彼らで言う所の「風石」であったからだ。

もしそれが本当なら、現在船体の9割を燃料にして必死に地球の重力圏を突破させているロケットをかなり経済的にすることが可能だし、この斥力を発電に利用すればかなり高効率のものが出来るに違いない。さらに車を簡単に宙に浮かせる事で流通革命が起こり（そのための法整備は大変だが）、航空機だってもっと大容量に人員物資を詰め込む事が可能だ。軍事面に関しては、空中を自由に機動し現行空母が影響力を発揮できない大陸内部にまで航空機を派遣できる空中空母が実現可能になるし、より爆弾やコンピュータを搭載できる輸送機や戦闘機の開発が可能になるだろう。

このような「夢の物質」は神に選ばれた国であるアメリカこそが管理し、国内利用にしても輸出するにしてもその利益を享受しなければならぬ。

それがアメリカの覇権を何人にも邪魔されずに永続させる唯一の方法なのだから。

2011年1月20日

中国の調査隊がアメリカとロシアの影響の及ばないイタリア半島に上陸。

現地のロマリア連合皇国と接触した。アメリカ、ロシア両国より

も一足遅れたのはその地理的關係と、スエズ運河の通過をアメリカの嫌がらせで止められたからである。そのため、自国の影響下にあるアフリカ諸国の支援を得ながらやっと欧州に到着したという感じである。

やはり先の両国の欧州での活躍に焦ったのか、現地勢力との交渉すらもなく、ひたすら軍を北上させた。

最悪なのは現地住民で、アメリカ、ロシアは少なくとも国際世論を気にしていたが、中国はその肥大した力と上向きの国力からくる傲慢からこれを無視し、ひたすら利益確保に動いた。

このため兵士の統制が充分に効かず、現地は強盗強姦などが多発する地獄となった。

そのせいで進軍に影響が出る段になり現地司令部はやっとそれらの行為を規制したが、彼らの通った後には草一本すらも残されていなかった。

アメリカ、ロシアはこれを強く非難。

しかしながら中国はこれを黙殺、あつというまにロマリア・ガリア・ゲルマニア国境まで軍を進めてしまった。

中国広報部は武装勢力に占拠された現地を解放したと宣言。

中国もロシアと同様に魔法の威力を生で感じており、今後魔法の研究は中国の最重要機密として扱われる事となる。

2011年1月21日

国連国際調査隊がガリア王国首都リュティスに到着。

編成と派遣に2週間以上もかかった理由は、ひとえに各国の利益調整のためである。

何しろ、何らかの形で新ヨーロッパの利益に関与したいという国家が多すぎた。

現状アメリカとロシア、中国に大部分が支配されているとはいえそこから漏れ出てくるものもあるだろうし、またこの三国からの現地開発の利権は経済恐慌に陥った各国が喉から手が出るほど欲しいものであった。

こうして到着した調査隊であるが、やはりというべきか本来の任務である調査に従事したのはほんの一握りであり、後はほとんど自国の利益確保に動いていた。

しかもこの調査自体がアメリカの良いように設定された「ツアー」であり、調査隊はガリア、ゲルマニアなどを視察したが大した結果もなく（しかし魔法の存在など衝撃的な内容ではあった）、数日間の日程の後、ガリア、ゲルマニアなどに大使を残して帰国する事となる。

しかしながら、その中で日本の調査隊員がトリステインという国家で歴史的な発見をする事になる。

2011年1月22日～25日 奔流

2011年1月22日

アメリカは浮遊大陸アルビオンで現状行われている内戦について憂慮する声明を出し、唯一の民主勢力であるレコンキスタに対する支援を表明。「虚無」を失ったと噂されるクロムウェル司教は王党軍に対して徐々に押されてきていたので渡りに船とこの支援を歓迎した。裏では、事実上ガリアがレコンキスタをアメリカに売り渡した結果となった。ジョゼフ王は昨今の状況の急変からレコンキスタなんぞにミヨズニトニルンの頭脳を使うのは勿体ないと判断したようであった。

支援と言っても義勇軍を派兵するという訳ではなく、純粹に武器販売・供給のみであった（それでもレコンキスタにとってはかなりのオーバーパスだったが）。アメリカは内戦が終わっても続いてもちらでも良かったのであった。終わったら終わったで自国の勢力圏が増える、続いてても武器販売で儲かる。要は、アフリカでやっている事と同じであった。

幸い、クロムウェル司教は従順な人間である。アメリカが欲しているのはこういう「素直な」指導者であった。

王党派の指導者はその無駄な矜持やプライドがアメリカの国益の邪魔になるだろうから。

2011年1月23日

ロシア・中国が非公式にアルビオン王党派を支援を開始。

アメリカが民主勢力としてレコンキスタを支援している以上表だって内戦に介入する事は難しいが、アメリカの勢力圏を増やす事は阻止したい。そのロシアと中国の思惑が合致した裏支援であった。

具体的にはロシアは自国で生産または中国から輸入した武器を東ゲルマニア国軍に供給、そこから現場部隊の独断としてアルビオンに横流しさせたり、アルビオンに対して人道支援と称してダミー会社を通じて食料と見せかけた武器をアルビオンに供給したりと様々なルートで王党派に武器を供給した。

潰しても潰しても他のルートで供給されるのでこれにはアメリカも手を焼く事になった。  
かくして、アルビオンは列強各国の代理戦争の場所と化したのであった。

2011年1月24日

この時期、国際社会から見たトリステインは孤立していた。

諸国からは「守旧派が支配する取るに足らない小国」と評価され、実際その通りであった。

今回の変化には一番鈍感であり、ゲルマニアが崩壊した事すらようやく知った有様だった。

故に誰もトリステインに接触しようとしなかったし、誰とも接触しようとしなかった。マザリー二枢機卿だけはこの状況に焦っているようだったが。

ガリアと西ゲルマニア（この時期は国連委任統治領ゲルマニア）というアメリカの勢力圏に国土が挟まれている状況から、このまま時間が経てばその経済支配下に置かれるか、暴発して自滅するかのどちらかかと思われた。

しかし、ある少年の発見がこの国を歴史の奔流に巻き込んだ。

この日、国連国際調査隊はトリステインに入国した。各国の利害調整から大所帯となっていたため車両に分乗しての移動となった。

護衛はアメリカ軍とトリステイン魔法衛士隊。さらに王女アンリエッタとその宰相マザリーニ枢機卿までも案内役として同行していた。これには、超大国アメリカ相手に面倒を起こしたくないマザリーニ枢機卿の思惑が絡んでいた。自国内に平民の国を入れる事に抵抗する貴族は多数存在する。こういった連中を抑えるためにも、アンリエッタという重石を置いておく必要があった。また、あわよくばこの機会に新しい国々とコネクションを作っておきたい。ゲルマニアとの同盟がご破算になった今新たな巨大勢力であるアメリカに接近する必要があった。マザリーニはジョゼフと同様に自国の問題をアメリカの手助けで解決するつもりだったのだ。

だが、調査隊がトリステイン魔法学院に視察に入った時その事件は起こった。

日本人の調査員が明らかに日本人と思われる少年を発見したのだ。そしてその少年は何やら貴族らしき少女にムチで追い立てられており、その体には生傷がいくつも出来ていた。

調査員は驚愕した。何故こんな所に日本人の少年が？随員が子供を連れてくるなんて話は聞いていない。

いや、そんなことより彼を保護すべきだ。明らかにあの少年は虐げられている。

同じ光景をアメリカ側随員も見ていたのだらう、マザリーニ枢機卿に彼は何です！と問いただしている。

私は何も知らない。本当だ。それもそのはずであった。オスマン学院長が王家に対するカードとして平民の少年をヴァリエール家の三女が召喚したという情報を完全に秘匿していたのだから。

そうしている内に事態は進行し、少年は調査隊の車両や人を見つけるとよろめきながら走ってきた。

「た、助けて…」

日本側随員の所まで辿り着きそう言うと彼は気を失った。

そしてその時、間の悪い事に貴族の少女が制裁と称して魔法を放った。

それは少年を中心として爆発、日本側随員数人と少年が吹き飛ばされ火傷や骨折、ひどい者は腕を失うなど重軽傷を負った。

これに対し護衛の米軍部隊が即座に反応、対テロ行動として脅威に対し発砲した。

タタタン、タタタン。渴いた音と同時に少女は倒れ伏した。

一瞬の静寂のあと学院中に悲鳴が響き渡る。その瞬間この場は混乱に包まれた。

調査隊側は少年を保護、負傷者を後送し治療を開始。学院側も少女に回復魔法を掛け同じく後送した。

幸い少女が弾丸を食らった場所は急所を外れており、何とか治療する事が出来た。また少年も爆発の中心に居た割には外傷が少なく一命を取り留めた。そしてこの場はマザリー二枢機卿が間に入った事により何とか事無きを得た。

しかしながらトリステインと国際社会との間に生まれた溝は決定的だった。

当然ながら国際調査隊にはマスメディアも同行しており、この光景は一部始終撮影されていた。

そして少年が少女にその意思に関係なく召喚という名の拉致をされていた事、使い魔と呼ばれる永久奴隷状態に置かれていた事、日常的に暴行を受けていた事が判明すると、衝撃的な映像と合わせ世界中の人々が激怒した。当事者の日本国民は特に怒り、トリステインに対する何らかの制裁措置を求めた。

日本政府もこの流れには逆らえず遺憾の意を表明し、トリステイ

ンに対し犯人の引き渡しを強く要求すると共にアメリカと、トリステインに対する制裁措置の協議を開始する事を決定した。

トリステインにとっては自国側にも被害が出ていた事が良くなかった。同じように貴族達、特に娘を傷つけられたヴァリエール公爵は怒り狂い、融和政策を執るマザリー二枢機卿を無視し自領での軍備を整え始めた。そしてそれに追隨して各貴族も次々と軍備を拡張していった。

彼らにしてみれば自分達は完全にコケにされたという認識だった。たかが一平民のために高貴なる貴族が殺されかけ、しかもそやつらは魔法も使えぬ平民の国ではないか。我々は神聖な領土に足を踏み入れさせるのも我慢してやったのに、ここまで礼儀を知らぬ奴らには制裁を加えなければならぬ。聞けば奴等は魔法に恐怖し調査隊とやらをすぐに撤退させたようではないか。平民に頼ろうなどという鳥の骨の浅はかな考えなど無意味なのだ。

情報の伝達手段が制限されたハルケギニアでは少女を一瞬で殺しかけた銃の脅威もばかして伝えられ、情報は都合の良いように解釈され、それがまた人づてに伝わっていく。最終的にトリステイン貴族の間に野蛮な平民の国に対する恐怖は皆無と言ってよかった。

マザリー二枢機卿は、この状況に絶望するしかなかった。彼はゲルマニアさえ一息に潰した彼我の戦力差を正確に理解していた。これまでの情報の伝達の早さは予想外であったが、今の時点でもなお融和の道を探っていた。具体的には渦中のヴァリエール嬢の引き渡しや日本に対する謝罪などであるが、しかしそれは国内の貴族の妨害やアメリカや日本、その他諸国の態度が先の事件で強固になった事もあって不可能となった。さらに親友を殺されかけた場面を目ではつきりと見たアンリエッタ王女までもが怒りから戦争に傾き始めるともう状況はどうしようもなくなっていたのであった。

2011年1月25日

中国がロマリアに大規模入植を準備。

中国の統治下にあるロマリア人民共和国の指導部では教皇や魔法の使える枢機卿が「研究協力」で多数連れ去られた代わりに中国の官僚や傀儡が配置されていた。

といってもまだ政府は準備段階であり、その基盤作りとして大規模入植が企画された。

これは中国が他国を自国の勢力圏に置く際の常とう手段であった。今回のロマリアのように自国民を入植させ民族比率を変え国を支配する。巨大な人口を持つ中国だけが可能な強引な方法であった。

壮麗なロマリアの寺院や礼拝堂は現地民の感情を悪化させるという事で取り壊しは行われなかったがそれ以外の場所では容赦なく自国民を迎え入れるための開発が行われる予定であった。

2011年1月22日～25日 奔流（後書き）

時間軸はアンリエッタ行幸前（使い魔お披露目会前）という設定です

## ハルケギニアの現状と総括？（2011年1月～2月）

> i17892 — 2416 <

図1・2011年2月1日時点のハルケギニア（ハルケギニア以外の国家は除く）

2011年1月～2月

ハルケギニアの変化

### ・政治

ガリア王国ではジョゼフ王の独断でのアメリカ合衆国との交渉妥結やその後のアメリカのガリア国内での専横から国内の派閥はジョゼフ派とオルレアン派の対立構造から新たに開国派と攘夷派という対立構造が誕生した。この派閥構造は概ねジョゼフ派＝開国派、オルレアン派＝攘夷派とそのままシフトしていった。オルレアン派やジョゼフ派であつても外交に関しては他の意見を持つ者もいたが、ガリア王ジョゼフ自体が開国の旗頭となつていたためにそれは極少数にとどまつた。オルレアン＝攘夷派は各地で連絡を取り合い、その後アメリカ＝ガリア枢軸が叩き潰すまでガリア国内で蠢動することになる。また、ジョゼフ王はアメリカ式の民主主義、三権分立、資本主義の三種の神器の導入を開始する。そのための憲法の作成に転移後数カ月は専念していた（もつとも、アルブレヒト？世救出作戦には無理矢理付いていたが）。さらに科学技術導入のため国内の魔法アカデミーの他に科学アカデミーを設置。研究者を配置してアメリカからの技術吸収を重視した。研究者は当初は得体の知れない体系に半信半疑だったものの、アメリカから派遣された技官が技術を伝授するに従つて、科学技術とその精華にのめり込んでいった。他にもジョゼフ王は貴族、平民に関係なく人材を登用していった。

これにはオルレアン派のみならずジョゼフ派からも反対の声が上がったが、ジョゼフ王はどこ吹く風であった。むしろ、両者の競争を奨励さえしていた。

ゲルマニアはロシアの侵攻により国土の半分を喪失、さらにヴィンドボナは東西に分断された。途中でアメリカの掣肘が入ったが、ロシアの侵攻が止まった線から東がゲルマニア暫定政府（後のゲルマニア共和国）、西が国連委任統治領ゲルマニア（後のゲルマニア連邦）、別名東ゲルマニア・西ゲルマニアに国が分割された。しかしながら、元々が都市同盟の寄り合い所帯の国柄が、分断された事による人心への影響はそれほどなく、その後ナショナリズムの勃興に従って再統一されるまでに実に数十年という期間を要した。民の忠誠は国家と言うよりむしろ自分の属する都市に向いていたのだ（再統一の中心となったのが自分の都市を分割されたヴィンドボナの市民だったというのは有名な話である）。アルブレヒト？世は数カ月後に再びゲルマニアの地に立ち西ゲルマニアをゲルマニア連邦として再編するが、その時既に東ゲルマニア・ゲルマニア共和国では対抗馬が存在していた。アードルフ・フォン・ビスマルク、後に「鉄血大統領」と呼ばれる人物である。

ロマリアでは、中華の洗礼が吹き荒れた。ローマでは大規模な粛清と組織改編が起こり、ハルケギニアを支配していたブリミル教の宗教組織は統治能力を完全に失い単なる儀式組織となってロマリア人民共和国国務院宗教部の下に再編された。これは単純に中国が統治の円滑化から存続を許されたものであった。むしろブリミル教が残っただけでも幸運であったと言えるだろう。旧来の上層部は教皇ヴィットーリオ・セレヴァレを含め、魔法の実験材料を中国が欲した事もあって文字通り「消えた」。新たな政治機構として「ロマリア共産党」が発足し、従順な元枢機卿と中国から派遣された人員が彼らの後釜に収まった。国名を「ロマリア人民共和国」と変更し、立法、行政、司法の三権は全てロマリア共産党の下に置かれ、一党独裁体制を確立した。しかしそれでも従来のロマリア宗教庁の統治

よりかなりマシになっていると言え、今までのロマリアの統治がいかに酷かったかが分かるだろう。ロマリア共産党は中国からの大規模な移民政策を推し進め、現地でかなり強引な開発を行った。これは旧来の住居を無勧告で破壊しその後中国人用住居を建設するなど非人道的なものであったが、これは大規模な公共投資となりロマリア人民にある程度還元されていたため、ロマリア人民は以前の政権と比べると些細な事と目をつぶり、ロマリア共産党を支持していくようになる。何しろ、聖職者が支配していた旧政権では金の環流は上流階級をもつてのみ行われ、人民に還元することなど無かつたし、寺院建造の際も無給で働かされていたのである。まさに天地の差であったといっても過言ではないだろう。

アルビオンでは、レコンキスタの圧倒的勝利で終わると思われていた内乱が地球列強の介入により泥沼の内戦と化した。銃器の飛躍的進化により魔法優位は完全に崩れ、突撃しか能のない貴族が次々に戦死すると残ったのは有能な王侯貴族か小心者で無能な貴族のどちらかであった。有能な貴族は軍の体勢を一新し、職業軍人のみで編成された常備軍を建設し、新兵器を念頭に置いた戦略を立て、補給を重視した。無能で小心者な貴族は時代の変化についていけず、狙撃でぱったりと死んだ。今まで出来なかったような改革が実現したのは単純に「やらなければ負ける」からであった。後にこの内戦は単に「アルビオン内戦」と呼ばれるのみだったが、ここでふるいに掛けられた貴族達はアルビオン再建に多大な力を発揮する事となる。

トリステインでは、未だ旧態依然とした体勢が維持されていた。王と貴族の搾取により平民は疲弊し人口流出が相次いでいたがそれすらも彼らは知ろうとしなかった。そういった中でトリステインは危機に立たされる。平賀才人召喚事件に端を発する国際社会からの制裁措置。トリステインではまさに変革、いや革命が巻き起ころうとしていた。

## ・経済

従来のハルケギニア経済はエキユー金貨に基づいた金本位制であった。それがたった一ヶ月で変わる訳ではないが、徐々に強力な貨幣の流入が始まった。ガリア、西ゲルマニアはドル。東ゲルマニアはルーブル。ロマリアは元。人件費の安さに目を付けた企業群の投資であった。開発し尽くされた先進国から途上国以下とも言えるハルケギニアへ。失ったヨーロッパの利益を取り戻そうという動きは誰にも止める事が出来なかった。ハルケギニアが転移してまだ一ヶ月でありそれほど大規模な動きではなかったが無視できない動きでもあった。既に追い詰められ始めたギルドも存在していた。旧態依然のギルドの利権構造では現代の経済戦争を勝利し続けてきた企業群に対抗できるはずが無かったのである。しかしこの流れに取り残された国家も存在していた。トリステインである。ガリアのジョゼフ王などはむしろ自国のギルドを潰す程の勢いで外資を入れていたが（彼にしてみれば付いて来れないギルドなど不要だった）、トリステインは旧来の利権構造を重視し、外資を法で締め出しにかかっていた。誰だつて甘い汁を突然吸えなくなるのは嫌だ。しかし彼らの思惑に関わらず彼らは外からの変革を強要されるのであった。

## ・軍事

ロシアからの理不尽な侵攻を受けたゲルマニアでは軍事面での変革が起こりつつあった。東ゲルマニアはロシアからの強要で、西ゲルマニアはロシアへの対抗で。どちらも戦訓から機動戦略の研究と常備軍の編成を急いでいた。何しろ、先の「ロシア - ゲルマニア戦争」では、敵軍にヴィンドボナに高機動で迫られた場合3000人の人員しか用意できなかったのである。これに対するゲルマニア軍人の悔しさは相当なものであった。もしあの時ヴィンドボナに10万を配置出来たとしても技術格差から何の意味も無かっただろう。しかし、何も出来ないよりはマシだったはずだ。無論、これには常備軍の編成を可能とする大規模な国内改革が必要で、それを超えて

も依然技術の格差や、軍を支えるのに必要な工業生産の貧弱さなどの問題があったが、それでも彼らは心配していなかった。先駆者なら世界に山ほどいるのだ。自分達はそれに追いつき、追い越していくだけなのであるから…。

ガリアでは、ゲルマニアほどでは無かったが、変革が起こっていた。アメリカとの人材交流には軍人も含まれており、ここで彼らはその用兵思想を目の当たりにした。世界中に部隊を派遣可能なアーシアンリング、そして戦術思想のエアランドバトル、それを支える巨大な技術力や工業力、そして中央集権体制。眼から鱗どころか感動で涙を流す者もいた。ガリアに同じ事が出来るとは思えないが、それでもある程度は可能なはずだ。もちろん障害は大きい。守旧派であるオルレアン派がそれだ。しかしそれもジョゼフ王が打ち破ってくれるだろう。ジョゼフ派軍人は自分達の王が正しい戦略眼を持っている事をブリミルに感謝したのだった。

アルビオンでは早速支援された兵器が運用され、その効果が実証されていた。大半の貴族はそこから眼をそらし、魔法の優位を疑わなかったが、有能な者は違った。これは積極的に運用すべき兵器だと。連発出来る銃、しかも有効射程はマスキットの比では無い。弾薬を食うのが玉にきずだが、それで奴らに勝てるのなら安いものだ。この時、彼らはこの兵器が後の泥沼の内戦を生むとは全く考えていなかったのだが。

2011年2月1日～7日 変革（前書き）

今回から観測スパンが長くなります。

## 2011年2月1日～7日 変革

2011年2月1日

米ガ和親条約、米ガ修好通商条約、アメリカ合衆国とガリア王国との間の相互協力及び安全保障条約（米ガ安全保障条約）が締結。それに伴ってガリア王国が国連に正式加盟。世界は新たな加盟国を歓迎した。

条約の主な内容としては、

- 1 ・アメリカとガリアは互いを国家として認め尊重する。
- 2 ・ガリアは段階的に封建制度を撤廃し民主主義を採用する。
- 3 ・技術交換。
- 4 ・自由交易。
- 5 ・ガリアは段階的に金本位制から管理通貨制度へ移行する。
- 6 ・ガリアはガリア国内でのアメリカ資本の風石優先採掘権を認める。
- 7 ・アメリカとガリアはガリアに危機が迫った場合、協力してその国土を防衛する。
- 8 ・そのためガリアはアメリカの現地基地使用权及び港湾使用权を認める。

ガリアとアメリカの国力差や、オルレアン派の蠢動によりガリアの情勢が不安定な事からガリアはアメリカに対し大きな譲歩を強いられる事となったが、そうガリアに悪い部分ばかりでは無かった。

2 に関してはガリアはまず中央集権制度を確立し、その上で民主制を敷く。その過程で貴族の軍事権と司法権、徴税権などを中央政府へ取り上げる。そうなればオルレアン派は元よりジョゼフ派の貴族も少なからずこれを無視する者や反乱を起こす者が出るだろうから、民主主義を錦の御旗に掲げるアメリカと協力してこれを排除、

肅清する。このための条約が米ガ安保でありここで言う7、8である。ちなみにジョゼフ王自身は立憲君主制を志向しており、トップダウンでの改革後は勅令（内閣の承認が必要）や王室予算という形である程度力を残し、自身も大統領選挙に出馬するつもりである。また、民主主義を導入するのに必要な国民に対する教育も強力に実行する。

4の自由交易は、アメリカのゴリ押しで盛り込まれた。正確にはアメリカ政府をアメリカの経済界が突き上げた形だ。ガリアの市場と安い労働力により「欧州ショック」の痛みを補うつもりなのだ。ガリアとしては、最初は圧倒的な経済力、技術力の差からマジックアイテムを除きガリアの製品はあつという間に駆逐されてしまうだろうが、技術をしつかりと吸収し国策として国の体力を高めていけば数十年後にはいい勝負が出来るはずである。幸い、ガリアには6000年の魔法技術の精華と大規模な風石鉱床がある。ジョゼフ王はしばらくはそれで耐え忍び、その後反撃に転じる考えであった。痛みは伴うが、保護貿易でぬるま湯に浸かっていては成長は無いのだ（もちろん、軍事や交通、農鉱業など国の根幹にかかわる部分は国营企業を立ち上げる）。またそれに伴い管理通貨制度を導入し、新通貨フュテュール（ガリア語で”未来”の意）を発行すると共にリュティスにガリア中央銀行を設立し為替取引を受け入れる。フュテュールの相場は変動相場制とする。アメリカ側諮問団により、もはやエキユー金貨では近年中に肥大する貿易に対応できなくなるという試算が出たのだ。ちなみに、新通貨を決める際アメリカドルにするかガリア独自のものにするかで一悶着があった。つまり、ガリアの経済を支配したいアメリカと自国の独自性を保ちたいガリアの対立である。結局、6の風石採掘権の優先権でアメリカが折れたが、独自通貨の場合、これからガリア自身で信用を作っていかなければならない。信用のあるアメリカドルと違い発行予定の新通貨は、しかも内乱が現実化しかかっている国家のものは信用が低い。発行は内乱後の予定だが、それでも信用は最低からスタートだろう。信用

のない通貨は使われなくなる。さらに現在流入しているアメリカドルの問題もある。というよりそもそも現代経済学を解する人材の育成もこれからであり紙幣の「紙」を作ることすら困難であった。こういった難問をどう解決するかにガリア王ジョゼフの手腕がかかっていた。

また、これらの屈辱的な条約により（ジョゼフ王の思惑はどうあれ国内の貴族にはそのように受け止められた）ガリアのオルレアンⅡ攘夷派の怒りは頂点に達した。その心は王家からますます離れ、ついに各領地で兵を密かに集め始めたのだ。

2011年2月7日

国連安全保障理事会、トリステインに対する経済制裁を決議。

トリステインが行っている国家的な非人道的召喚・拉致は人権に対する重大な挑戦であり平和を脅かすものと断定。

これを即座に中止、平賀才人召喚拉致事件の犯人引き渡しや現政権の退陣、国連の勧告する世界人権宣言に批准するよう要求すると共に、それが行われない限りトリステインに対しその周辺の貿易国との交易品に関する経済制裁を実行するとした。流石に、いかに日本が訴えようと拉致事件や国連国際調査隊襲撃事件のみでは軍事力行使は出来なかった。常任理事国のロシア、中国は何の利権もない小国のためにアメリカにたてつくのは意味が無いと判断した。

ちなみに、安全保障理事会の常任理事国にまたも日本、ブラジル、インドは入れず、事実上今後の安全保障理事会はアメリカ、ロシア、中国の三国が運営していく事が決まった。せっかくヨーロッパ諸国が抜けて拡大した権限を手放す理由が無いという事だった。

経済制裁であるが、具体的にはトリステインの陸路、海路を封鎖し、交易品を制限する。

陸路はアメリカ-ガリア王国軍が、海路はアメリカ海軍が封鎖し、

それぞれでガリア両用艦隊が哨戒に付く。空と海を一つの船体で行き来出来る利点が発揮された形である。

この封鎖に関する費用は半分はアメリカ、もう半分は当事者の日本が拠出させられた。

トリスティン王国、王都トリスタニアの王城の一室では一人の聖職者に見える老人が苦悩していた。

彼、マザリー二枢機卿は現在の絶望的な状況から逃げ出すという選択肢もあったが、自分がトリスティンを支えているというプライドからやせ細りながらも宰相としての執務に当たっていた。

だがそれも限界に近付いていた。水メイジからもこれ以上の執務は身体に重大な影響を及ぼすと言われていた。

そこまで彼を追い詰めているのは今日勧告された「経済制裁」という、マザリー二には聞きなれない言葉だった。

しかしその内容を見てみれば…これは「脅し」だという事が良く分かる。路上でチンピラがやる「恐喝」に近いだろう。

つまり彼らの要求を飲まねばトリスティンはこのまま発展もなく近いうちに死を迎えるという事だ。

だがその要求を飲む事は現状では不可能に近かった。

春の使い魔召喚の中止？ルイズ嬢の引き渡し？現政権の退陣？人権宣言という訳の分からない物に同意しろ？

どれ一つとっても無理だ。本当に無理という訳ではない。やろうと思えば可能だろう。しかしそれをしてしまえばこのトリスティンは崩壊する。平民の国の要求で学院の行事である使い魔召喚を中止する事は国内の貴族は自分達を侮辱されたと捉えるだろう。ヴァリエール家の令嬢が傷つけられた今それを実行してしまえば馬鹿共は必ず暴発して勝手に戦争を仕掛けるだろう。ルイズ嬢の引き渡しな

どまずもって無理だ。彼女は現在ヴァリエール家に匿われており外に出る事、出す事は許されていない。王家の命令にも彼らは従わないのだ。強引に行おうとすればそれだけで内戦になるだろう。現政権の退陣―私は退陣しても一向に構わないが、今何とか貴族達の暴発を抑えているのは私であり、その私が退陣すれば彼らは必ずアンリエッタ王女を持ちあげて戦争をさせるだろう。それはダメだ。人権宣言とやらに批准した所で同じだ。貴族達はまたもや侮辱と捉えるだろうし、彼らが批准などする訳が無い。それで一時しのぎしても、批准したにも関わらずそれが為されていなければ必ずトリステインは非難のムシロにされるだろう。

残された道は早急の国内改革だがこれも困難を極める。まずアンリエッタ王女が戦争に傾いている。彼女は政務より友人を優先させる傾向がある。何でもルイズ嬢の復讐として各貴族に手紙を送って彼らの敵愾心を煽っているのだそう。小娘が要らぬ事を…。さらに国内最大の貴族ヴァリエール公爵が王家の命令を無視している兵を集めている事も痛い。これで国内の多数の貴族は私の命令など簡単に無視してのけるだろう。ヴァリエール公爵がやっているから、で免罪符になってしまっているのだ。そのヴァリエール公爵だが…彼はもう止まらないだろう。怒りは既にある程度冷却されているだろうが、周りの貴族の持ち上げで退けに退けない状況になってしまっている。尊王攘夷論などというものまで出てきているそう。ここで退くのは彼の今後の立場に関わるだろう。

かくなる上はもう戦争しかないのか…いや、駄目だ。勝てるはずが無い。それこそ不可能だ。先のゲルマニアの敗北、ガリアから入ってくる情報、どれを聞いても我々トリステインの国力…いやハルケギニアの全ての国を足し合わせても「アメリカ合衆国」や「ロシア」、「中国」の内どれか一国でもその足元にすら及ばないだろう。それだけの圧倒的な経済力、技術力、軍事力を持っているのだ。彼

ら」は。何故今までの歴史で彼らの名前が全く出て来なかったのかは不明だが、今こうして彼らがハルケギニアに対し軍事的、経済的にその手を伸ばして来ているのは確かな事実だ。現にゲルマニアは国土を半分奪われ、ロマリアは国が消滅した。私の立場を保障するブリミル教も宗教庁もいつの間にか、ハルケギニアの支配者から路上の乞食に転落していた。そんな事はブリミルが生まれて6000年間誰も出来なかった事だ。今、ハルケギニアは変革を迫られているのだ。私はそれを今やっと理解した（なんとガリア王ジョゼフはもっと早くこれを理解し、変革の波に乗っていたのだ）。私は諦める訳にはいかない。このまま各地の兵の召集が終わる限界まで国内の貴族の説得に全力を注ぐしかない。幸い「彼ら」も平民一人が召喚されたという事実だけでは大義名分にならないようだ。戦争するなら現時点でトリスタニアは蹂躪されている。だがかれらは「脅し」とトリステインの緩やかな死を待っているだけだ。まだどうにでもやりようはあるはずだ。そして生き残り「変革」の波に乗り、トリステインを根本から変え、前進するのだ…。

だが彼の努力はむなしく、後に起こる「事件」で絶望のどん底に叩き落とされる事となるのだった。

## 2011年3月23日～24日 事件

2011年3月23日

一か月前のトリステインに対する経済制裁から、ハルケギニアでは特に変わった動きは見られなかった。

ロマリアでは相変わらず当局による聖堂騎士団残党の掃討が行われていたし、アルビオンでは未だ内乱が続いていた。西ゲルマニアでは領主が勝手に独立を宣言し、東ゲルマニアでは中央政府設立の準備が急がれており、ガリアではオルレアン派の蠢動が続いていた。

しかしながら、各国を揺るがすような特筆すべき事態は起こっていなかった。

トリステインでは、最初に徴兵が行われた第一陣の速成訓練が終わろうとしていた。最低限、行軍をする、戦列を作る、槍袈を前に出す、戦列を維持したまま戦場を機動する、といった事は荒削りながらも可能となってきた時期であった。まだこの段階で戦場を任せるには不安があるが、トリステインが経済制裁と言う名の「兵糧攻め」を受けている以上、仕方のない事だった。食料は、トリステイン国内で自給する事自体は可能なのだが、この徴兵と経済制裁で小麦が高騰（実際には人道的見地から小麦は禁輸対象にはされていないが、ガリア側商人が自主的に控えた事と、トリステイン側商人が全ての物品が禁輸対象だと勘違いして買い占めた結果だった）し、それこそ平民には手に入らない程値段が上がってしまったのだ。王室や各領地が小麦貯蓄を開放しているが全く追いついていないのが現状だった。それを証明するかのように各都市では早くも餓死する平民が続出し、これが村落となるともっと酷い事になっていた。

ヴィリエ・ド・ロレーヌはここに来る途中にそういった村落をいくつも見ていたが、何の感慨も受けなかった。彼は貴族を生かす為に平民が死ぬのは当然と常日頃から思っていた。虫けらが死んだと

ここで人間が何の感慨も受けないのと同じで、彼にとって平民とは支配の対象であり、自分より下の存在であり、貴族である自分を敬って当然の存在であり、魔法が使えないクス同然の存在であった。

幼い頃、大規模な飢饉でこれと同じような光景を見た事がある。

その時領主である父は何と言っていたか？

「ヴィリエ、彼らに同情してはいけないよ。そうしてしまえば彼らは付け上がり、二度と円滑な統治は出来なくなってしまうだろう。いいかい、彼らは虫けらなんだ。我々が支配すべき存在だ。我々貴族がいなければあして何も出来ない存在なのだよ……」

そうした教育――支配者の心得――を幼い頃から受けてきたヴィリエは、平民が死んだぐらいで動揺をする事は無くなっていた。

それは確かに為政者に必要な資質なのかもしれない。だが、それは同時に人として非常に惨忍な性格を植えつける事にもなった。

平民など虫けら以下の存在なのだから、我々が殺したって構わない。彼らを無理に生かす事だつてする必要は無い……。

ただ冷酷なだけなら良かったが、為政者として、人としてあつて然るべき最低限の道德すら失ってしまったていた。

そんなヴィリエは現在、トリステイン軍ローヌ連隊の一士官として、二十人ほどの平民の小隊を率い、ガリア国境の偵察に出てきていた。彼は以前までトリステイン魔法学院の学生だったが、戦時下で学生も士官として徴兵されたため、彼自身もそうした徴用を受け、故郷のローヌ連隊に配備されていた。配下の平民たちはこれまた戦時動員兵で、未だ統率の取れていない動きを見せていたが、ヴィリエもまた同様に新米士官だったのでそれに気付く事は無かった。そうした事に気付くのは常に最先任として付けられている熟練の傭兵であり、その度に兵に対し怒号を浴びせていた。ヴィリエはそれが面白くなかった。何故貴族である僕を無視してたかが平民の

コイツが勝手に指示を飛ばしているんだ、クソクソクソクソッ！  
なので、ヴィリエ自身も負けじと無意味な指示を飛ばすのだが、  
その度に兵の隊列は乱れ、先任傭兵には露骨に嫌な顔をされるのだ  
った。彼のプライドは痛く傷つけられ、鬱憤が溜まっていった。

だから、彼の小隊が国境を封鎖する米軍部隊を発見した時、そう  
した事が起こるのは必然だったのかもしれない。

彼はその部隊を見つけると、急に体の内側から怒りが噴き上がっ  
てくるのが分かった。

こいつらが例の平民の国の部隊か！たかが虫けらの癖に我ら貴族を、  
ひいてはアンリエッタ王女殿下を侮辱しやがって！

そんな事は許されないんだ。平民が貴族に盾付くなんて許されない  
事なんだ！こいつらは死んで当然だ！

アンリエッタ王女殿下は直々に僕に手紙を送って下さった。殿下は、  
大切な親友であるヴァリエール家の三女ルイズが平民共によって無  
残にも傷つけられた事を深く悲しんでおられた。その上で我ら貴族  
の力を平民共知らしめるべきだとおっしゃった！

この平民共には罰を下すべきだ。アンリエッタ王女殿下もそれを僕  
に期待している！僕が今すべきことはここでこの平民共を殲滅し、  
貴族の力を見せつける事だ。そうすればもう二度と僕たちを侮辱し  
ようなんて思わなくなるだろう…。

「小隊、横列隊形」

ヴィリエと共に草むらに隠れていた先任傭兵はその指示を聞いた  
瞬間蒼い顔をした。

この貴族のお坊ちゃん馬鹿なのか？こちらからの開戦は厳に慎め  
という指示を聞いていなかったのか？

敵の戦力が分からない今、ここは偵察任務に専念すべきだ。

「ロレーヌ殿、我々の任務は偵察です。それにこちらから戦端を開く事は許されていません。」

ヴィリエの顔がみるみる赤くなる。

こいつ！前から気に入らなかったが貴族である僕に口ごたえをしやがって！

貴様ら薄汚い傭兵なんか僕たち貴族の崇高な使命など分かるはずが無い！

「僕は貴族だぞ…命令に従わなければどうなるか分かっているんだろっな？」

そう言つて先任傭兵に杖を当てるヴィリエ。これには流石に彼も肝が冷えたのかそれ以上何かを言う事は無くなった。

ヴィリエはそれに満足し、小隊を敵にばれない様に横列隊形に遷移させた。

もし彼が―先任傭兵がゲルマニアの圧倒的な敗戦を経験した者なら、ロマリアでの絶望的な戦線を体験した者なら、自分の命を賭してでも頑として指示を受け入れなかっただろう。しかし悲しい事に彼はトリスタニアにいた「ごく普通の」傭兵だった。彼は敵の持っている黒い棒から連続で銃弾が出るなんて事は知らなかったし、敵は無線の発達により散兵戦術を得意とし、その軍装は周囲に溶け込むための物であることなど知らなかったのだった。

槍兵と銃兵が待機し、攻撃態勢が整った所で、ヴィリエは指示を出した。

「小隊、攻撃開始！」

- - - - -

マザリーニ枢機卿が王城でその報告を聞いた時、彼は全身の血の気が一気に引いていくのが分かった。

ガリア国境で偵察任務に就いていた小隊が指揮官の独断でアメリカ軍封鎖部隊を攻撃。完全にこちら側の奇襲だったが、お互いに10名程度の損害を出し撤退。小隊長は銃撃を受け戦死。さらに、その報告を聞いたロレーヌ連隊が戦果の拡大を図るため独断でガリア国境を越えたが、待ち受けていたアメリカ・ガリア軍に包囲され壊滅。命からがら逃げ延びた。顛末を聞いた周辺諸侯の連隊が国境に集結し、現在国境を挟んで睨み合いが続いている…。

これでは明らかに彼らに大義名分を与えるようなものではないか！もはや戦争回避は不可能に近い。国内の貴族に対する説得工作も芳しくない。

現場の独断だったと言い訳する事も出来るが、アメリカはそんな事を聞く耳を持たないだろう。

そして私には彼らの要求を飲む事は不可能に近い。

そこまで考えた時、マザリーニは意識が遠のくのを感じ、床に倒れ伏した。

マザリーニの体はこの連日の激務と心労で限界に達していた。

秘書が必死に呼び掛けるのが聞こえるが、彼はそのまま意識を手放した…。

2011年3月24日

「昨日、彼らトリステインの卑怯な奇襲によって13名の尊い命が失われました。」

彼らは、我々の拉致事件の犯人の引き渡しという正当な要求を再三に渡って無視した上に、先制攻撃を仕掛けてきたのです。

かの国では、封建主義的な政権が未だ支配し、貴族を名乗る者たちにより、何の罪もない民衆が日々虐げられております。

もはや我々はこれ以上、かの政権の存在を認める訳にはいきません。我が国は、トリステイン民衆の代弁者としてトリステインを支配する悪の政権を打倒するために実力行使も視野に入れた行動をする用意があります。」

アメリカ合衆国大統領、演説にてトリステインに対する事実上の宣戦布告。

同時に、48時間以内の返答と先の要求をトリステインが受け入れなければ、アメリカハルケギニア軍（US H A L C O M - 兵力約10万）を含む多国籍軍によって現政権に対する武力制裁を行うとした。

多国籍軍と言っても地球国家はほぼアメリカ単独と言って良く、他はオーストラリアやカナダなどが少数参加するのみである。日本は世論もあって相変わらず海上補給任務に割り当てられた。

アメリカ軍の戦力が少ないように見えるが、これはアメリカ欧州駐留軍10万がそっくり消滅した事による痛手からまだ回復しきっていないからである。現在欧州転移に伴いアメリカ軍全体が再編中であり、イラクなどから戦力を抽出しハルケギニアに派遣している。

注目すべきは今回ハルケギニアで初めて地球諸国と共に多国籍軍として参戦するガリア王国である。担任は両用艦隊を用いた空挺強襲や哨戒・輸送任務と陸軍兵力を用いた経済制裁から継続しての国境封鎖である。特に両用艦隊の巨大な輸送力が期待されていた。5〜10ノット程度とはいえ、トラックなどの輸送車両より遙かに積載量が見込め、空中を進行し、燃料の消費も少ない。木造の船体で

脆弱であるとはいえ、それだけで現行のあらゆる陸上ロジスティクスを凌駕する性能があったのだ。

それまでの地球社会では陸上より海上の方が輸送力が高いのが当たり前であった。海は液体であるので、そのまま滑るだけで移動できるが、陸ではそれに比べて非効率な車輪を回さなければならぬ。海に通行コストを上げる国家は無いが、陸には存在する。海上には通行を妨げる峻嶒な山脈はないが、陸にはある。海は地球の7割を占めるが、地上は3割である。ロジスティクスを支配した者が世界を支配するというが、大航海時代以降は、スペイン、イギリス、アメリカなど海を支配する海洋帝国が世界の覇権を握っていたのである。

それがこの風石を使用した空中艦艇の出現により一変しようとしていた。海上と陸上（空中）の輸送コストがほぼ同じになる。すなわち、全世界のロジスティクスが劇的に変化する。もはや海を支配した者が世界の支配者であるとは言えなくなってきた。地球国家もまた、変革の時を迎えつつあるのだった。

それはともかく、これは単なる武力制裁ではなく、新たに出現したハルケギニア諸国にアメリカの軍事力を見せつける――「衝撃と畏怖（shock and awe）」の効果も織り込まれていた。トリステインという国家はもうすぐ超大国の圧倒的な軍事力により叩き潰される――全世界の国家はそれを理解し、情勢を固唾を飲んで見守っていた。ガリアも、ゲルマニアも、ロマリアも。分かっているのは当のトリステイン貴族だけだった。

もはやトリステインは風前の灯であった。貴族軍もこの動きを察知し、アンリエッタ王女を総司令官、倒れたマザリー二枢機卿に代わってヴァリエール公爵をその補佐として戦力の集中を急いでいたが、いかんせんその動きは軌道上の眼から察知されていたのだった。

アメリカ軍は敵の戦意喪失を狙い、戦力が集中した所を包囲殲滅

し、敵司令部を一気に叩く作戦を立案。  
これを「トリステインの自由作戦」と呼称した。

2011年3月23日～24日 事件（後書き）

次回からトリステイン戦争に的を絞ります。

## トリスティン戦争・上

「身動きの取れぬ彼らを天の高みから見、手足に指令を出し、対処不可能な攻撃で屠るその姿は、まさに神が人間に鉄槌を下す場面のように思えた。」

―ガリア観戦武官・クラヴィル卿

戦術面において、現代地球国家の軍隊と、トリスティン―ハルケギニア諸国の軍隊の間には2つの決定的な違いがある。

その一つが「兵器の違い」である。地球の歴史において、時代が下るにつれ兵器の射程はより長くなっている。槍と矢、騎馬が主力の中世では互いの交戦可能範囲は1〜100mほどであったが、銃や大砲が出てきた近世ではさらに数百m〜数km、現代に至っては多種の兵器兵装により数十m〜数百kmとなっていた。

ではハルケギニア軍はどうだろうか。彼らの装備は槍と矢、マスケット銃、騎馬（幻獣）、大砲、そして魔法である。この事から一般的なハルケギニア軍の兵装は地球における近世時代のものと同様であり、魔法についても一部の大魔法―虚無など―以外はそこまでの長射程を実現できないことから、交戦距離は1m〜数kmの範囲であると考えられる。

また、機動速度についても圧倒的な違いがある。ハルケギニア軍ではその大部分を占める歩兵の移動手段は主にその足であり、機動戦力である騎兵や幻獣についてもその最高速度は毎時40kmは越えない（行軍速度ならさらに小さく60〜80km/日である）。竜は航空兵力であるが、その速度は第二次大戦初期のプロペラ機とそう大差ない。それに対して現代地球国家の軍隊では、大部分を占

める歩兵が機械化されており、毎時60km、行軍なら120km/日の速度が出る。ほぼ全てが機動戦力であると言っても差し支えないだろう。

そして、もう一つが「ネットワークの違い」である。まず、トリステイン軍を始めとするハルケギニア諸国軍での情報伝達手段とは何であろうか？

声、人足、馬、竜、幻獣、のろし、ラツパなど、様々なものが考えられるが、どれも速度が遅いか、情報を共有できる範囲が限られており、またやり取りできる情報も少なく、不確実である。遠見の鏡と呼ばれるマジックアイテムがあるが、これは術者が遠くの出来事を見る事が出来る、というものであり、受信媒体というものが存在しないため、双方向の情報伝達は実現しにくい（例えば鏡の視線の先に文書を置いたり、2枚の鏡をそれぞれで持つ事で達成する事自体は不可能ではないが、流動的な戦場ではお互いの座標が常に変化するため、対応出来ない可能性が高い。そのためガリアなどでは戦場での通信と言う意味での導入は見送られ、専ら連絡所を中継した情報網構築に用いられている）。このため、ハルケギニア諸国では遠見の鏡は、戦場の空中から見下ろす形で、司令官が現在の戦況を把握する際にのみ用いられてきた。

話がそれだが、従って、ハルケギニア軍では、小隊、中隊などの直接戦闘単位では歩兵の戦列に代表されるように指揮官の声が届く密集隊形を取らざるを得えず、また各部隊間では声が届く訳もないので、伝令を使わなければならない、また翼や中央の各指揮官も戦況を逐一確認しなければならないため、流動的な戦闘に対応しかつ情報の伝達を確実に行うためには司令部と戦場の距離はそれほど離す訳にはいかなかった。そのため、常に司令部が壊滅する―脳死の危険を常にはらんでいた。こういった中で数万や数十万に怎么办呢と大軍を動かすのは並大抵の事では無く、その戦術機動は翼や中央を任された各指揮官に一任され、故に各翼や中央が同期して攻撃

するために、時にはいわゆる「阿吽の呼吸」なるものも必要とされた（重大な局面で一々伝令など放っていてはチャンス逃してしまふ）。これはある意味では非常に危険な事である。各指揮官の独断において行動が決められるため、行動の同期に失敗してしまえば――それだけで全軍崩壊の危機にさらされてしまうからである。言ってしまうえば、軍隊のネットワークとは体の神経であるので、上手く神経が通らない上に勝手に動く手足を上手く統率し、敵の体を効果的に殴らなければならないのだ。

ではそれに対する現代国家の軍隊のネットワークとはどのようなものだろうか。諸君も御存じの通りだと思いが、無線通信を発展させたそれは、ハルケギニア軍とは比べ物にならない性能を持っている。瞬時かつ確実に情報が伝達され、範囲はほぼ地球全域であり、伝達可能な情報量は膨大な物となる。これは即ち、ハルケギニア軍と比べて以下の点で優位に立っている。

- 1 ・歩兵が密集する必要が無い。
- 2 ・各部隊間が密集する必要が無い。
- 3 ・したがって、戦場の大きさがより大きい。
- 4 ・各部隊間の連携がより容易である。
- 5 ・司令部と戦場を離す事が可能である。
- 6 ・指揮官の意思決定がより迅速でかつ正確に可能である。

歩兵や各部隊が密集する必要が無くなれば、砲撃などの範囲攻撃を受けた際の被害を軽減する事ができ、戦術機動の柔軟性が増す。また、各部隊の連携が容易になる事により、散兵戦術を取った際の各個撃破のリスクも低くなる。同期攻撃の効果も高まり、全軍崩壊のリスクも低減される。また、各部隊の距離が離れる事により戦場が大きくなる。戦場の大きさが相手より圧倒的に大きければ、相手の戦術機動はもはや意味を為さない。何かしようと動いた所で、それは戦場の大きさの違いにより「何も動いていない」事と等しいから

である。また、司令部と戦場を切り離す事により脳死による機能不全のリスクを低減する事が出来る。また、指揮官の意思決定がより迅速かつ正確になる事により敵に対して常にイニシアチブ（主導権）を取る事が出来る。

では、その兵器とネットワークの性能がこれほどまでに異なる、ハルケギニアの軍隊と現代地球国家の軍隊が戦ったらどうなるか？  
答えは簡単である。

まず、ハルケギニア軍はそのネットワークと機動速度の差より、相手に常に主導権を握られた状態で戦闘を開始しなければならない。ハルケギニア軍側の意図は全て邪魔された形で戦闘が始まるといえばその悲惨さが分かるだろう。さらに、ハルケギニア軍が何かしやうとして機動した所で、それは現代の軍隊において意味を為さない。高性能のネットワークと高機動を駆使され、さらに外側から包囲されるのみである。

戦闘が始まって、ハルケギニア軍の悲惨な状況は変わらない。ハルケギニアの軍隊が現代の軍隊に有効的な攻撃を加えるにはまず相手の攻撃圏内を強行突破せねばならず、その間に射程外からの一方的な攻撃によってほぼ殲滅状態に近い、かなりの出血を強いられるだろう。また突破出来たとしても相手はそれを上回る速度で移動しており、捕捉する事は難しい。したがって、ハルケギニア軍からの打撃が現代地球国家の軍隊に与えられる可能性はまず無い。

もちろん、これは地形や双方の戦術によってある程度左右されるが、こういった戦争がこれから行われようとしているのであった。

各国ともこの戦争に注目し、観戦武官を派遣していた。何しろ、魔法というイレギュラーがあるものの、中世・近世時代の生き証人のような国家と現代国家との戦争が始まるのだ。しかもロシアや中国の火事場泥棒とは比べ物にならない形で。特にハルケギニア諸国においては死活問題であったのは想像に難くない。ガリアはもちろん、両ゲルマニア、ロマリア、さらには内乱中のはずのアルビオン

の両勢力もトリステインに武官を派遣していた。自分達がこれまで行ってきた戦争が根本から否定される光景は、見たくないものであったが、同時に、見なければならぬ物であった。

2011年3月26日に起こったトリステイン戦争は、こうして始まった。

<<トリステインの自由作戦>>

>i19102—2416<

図1・トリステインの自由作戦概要

アメリカの戦略目標としては、トリステインの現政権及び貴族の追放、風石鉾山を含むトリステイン経済の掌握である。

それを達成するための作戦目標としては、陸海空軍を用いた迅速な司令部排除、ゲリラ化を防ぐため敵野戦軍の早期殲滅、政権首脳陣の捕縛、そして戦闘終了後の行政部隊の大量投入である。

これを実現するため、まずは4個空母打撃群に代表される海空軍戦力を持って、トリステイン各都市の中枢を爆撃し、指揮機能を麻痺させる。各都市は順次ガリア国境から北上する第3機械化歩兵師団やエアボーン部隊である第101空挺師団などを含めた約6万の部隊とゲルマニア国境から西進する第4歩兵師団、また北部に空挺降下し展開する第82空挺師団で制圧していく。この際、ガリア両用艦隊などの大輸送力を用いて人心掌握のため民衆に対する人道支援を行う。約2万の敵野戦軍は、これを軌道上から逐一監視し、最適の場所とタイミングで拘束、包囲殲滅する。増援が出ない様、トリスタニアを西部から強襲上陸した第2海兵師団や、主攻から抽出した戦力、さらに砲爆撃をもって拘束する。その後、大部分の戦力をもってトリスタニアを包囲し、敵の目を引き付けている間に特殊部隊によって王城を制圧。王族など首脳陣を拘束し、その後北部で

残党を掃討、戦闘終了宣言を出す。なお、全フェイズに渡って制空権の獲得と航空支援を徹底する。

その後、行政部隊によって現地民の政権を打ち立てるまで治安を確保し、現地政権に対して権限を移譲する。

なお、民主化については、まだ現地民の教育水準が適当でないとして、現地政権に対し諮問団という形で権限を残し、教育水準が上がった後、民主化を推進する。

これが、大まかなトリステインの自由作戦の概要である。

アメリカが悩んだのは、現地の貴族が、軍指揮官であり、行政の長であるという点についてである。

イラク戦争の反省から、アメリカは現地の行政官はなるだけ残す方針であったが、アメリカをして排除すべきとされる貴族こそが、現地行政を唯一知っている事が問題となったのである。そこで、アメリカは大量の人員と物量に任せて各都市で復興行政や人道支援を行い、それによって治安を確保している間に現地に詳しい教会や自治都市など現地勢力と連携をはかり、現地行政について研究するという何とも泥縄な方針を打ち出した。しかしながら、これはここ最近のトリステインの経済状態や、平民の戦争認識―戦争は貴族が起すものであり、貴族のもの―といった、ナショナリズムの欠如といったよい国民意識を勘案するに、有効な政策であると思われた。いつの時代も、パンがある間は民衆は従っているものだ。

もちろん、これには莫大な費用が伴うが、それはトリステイン国内の、新時代のエネルギー源である風石鉱山で賄われるはずであった。

<<実際の推移>>

作戦は、当初の予定よりあっけなく進んだ。

開戦壁頭、アメリカハルケギニア統合軍（USHALCOM）は敵中枢施設や空中艦隊根拠地にトマホーク巡航ミサイルや、4隻の

空母を発進したF/A-18E/Fスーパーホーネットなどの艦上戦闘爆撃機、1月からガリアで建設され、今回の戦争に伴いムリヤリ完成させた野戦飛行場を進発したステルス爆撃機によって精密爆撃を仕掛けた。これは、敵軍の指揮能力を喪失させると共に、トリステイン空中艦隊を港に係留されたまま撃破し、制空権の確保を行うための攻撃であつた。

この攻撃により、開戦24時間以内には、各都市の中心部に位置する領主の居城・館、そしてラ・ロシエールに係留されていたトリステイン艦隊はあつけなく撃破された。

アメリカによるこの一連の空爆は、トリステインでその光景を間近で目撃した者からは「天からの一撃」と呼ばれ恐れられた。固定化の掛けられた城はたったの一撃で無残にも崩れ去り、ラ・ロシエールのユグドラシルは、三日三晩燃え盛つたという。

制空権の確保が確認されると、陸軍部隊がガリア国境からラ・ロシエール方面を主攻として交易都市シウルピス方面とに二手に分かれ、街道沿いに進み、トリスタニアまで各都市を占領して回つた。ここでも、アメリカ軍は難なく進撃する事が出来た。少数の騎士残党と小競り合いはあつたものの、占領は順調に進んだ。アメリカ軍は、都市の城門をくぐる時、兵士一人一人がなるべく車の外に顔を出して、住民に対して笑顔を手を振る事を忘れないように厳重に注意していた。平民達は敵愾心よりも巨大な城を一瞬で破壊した力にまず畏怖し、その後こういつた地道な宣伝工作や各種支援が始まると、略奪をせず、住民に対して食糧援助やインフラ整備をするアメリカ軍に対して好意的な感情を持つようになった。これはイラク統治後期にアメリカ軍が占領行政に行き詰っていた際に、自衛隊がサマーワで行っていた復興支援を真似たもので、大規模な基地に引き籠ってテロリストが現れた時だけに攻撃するのではなく、交番を作つて兵士が現地に分け入り自ら復興支援を行うなど、現地民との交流に主眼を置いた占領行政を行う事で、イラクの治安が好転したと

いう事例に基づいて行われた。

ともあれ、そういった仕事は後進の占領行政部隊によって行われるものであり、実戦部隊はすぐに敵野戦軍包囲のため進発していた。

そして、衛星から逐一監視されていたトリスティン野戦軍約2万は、トリスタニア南40km地点で集結している所を、アメリカ軍約6万の接敵を受ける事となる。

## ギーシュ・ド・グラモン

軍の士官用礼装に身を包み、ランプの仄かな明りに照らされた、数々の花が咲き誇る庭園の白畳の遊歩道を背筋を伸ばして歩く。このランプは、かの「大異変」の後に、月の光が弱まった事から取りつけられたものであった。暗さで道を踏み外し、庭園を荒らしたりすることのないようにという理由からであった。そのランプの光量で補っても、しかし以前と比べていささか暗くなったその遊歩道を歩いていくと、周囲に比べひときわ光を放つ建物が近づいてくるのが分かった。

その外観はそう華美ではなく、度が過ぎて享樂的という訳でもない、清潔感を漂わせる白亜の城であった。ガリアにあるヴェルサルティル宮殿のような荘厳かつ壮麗、まさに王権を象徴するかのような城とは対照的だ。

### ―トリスタニア王宮

しかし、ギーシュ・ド・グラモンは知っていた。外側は貞淑なように見えても、その内側、内装はまさにハイソサエティを体现するかにように華美、かつ享樂的であることを。

そのホールでは現在、これから戦争へ向かう貴族士官のためのパーティが開かれていた。本来であれば、王宮のような中央社交界の会場は、ギーシュのような木っ端貴族は、陸軍元帥である父親の同伴なしでは入場すらできない。ギーシュが王宮の内装を知っているのもそういう立場で入場した事があるからであった。しかし今回は、戦地へ向かう士官を送る催しということで、全ての貴族士官に対し招待状を送りもてなすなど、王宮側も大盤振る舞いのようなのだ。いや、下手にケチって恨まれては困るという事か。

そんな事を考えながらさらに王宮に近づけば、高級窓から漏れ出る光に交じって、宮廷音楽隊が奏でるワルツの音が聞こえてきた。かすかに風に乗って聞こえるそれは、以前のギーシュならこれからの前途に心躍らせる類のものであったが、現在のギーシュは、いささか複雑な気持ちでそれを聞いていた。

ホールの扉に辿り着き、ボーイに招待状を見せる。入場を許されると、両脇に控えた衛兵が、それぞれ取っ手を掴み、白で塗られた重厚な木製の両扉を開く。

ギギギ、と扉のつがいが重い扉らしい音を立てゆっくり開いていた。ゆるやかな風がギーシュの顔をなぜる。漏れ出ていたワルツのメロディを遮るものは何もなくなつた。

ギーシュはボーイと衛兵に感謝の意を込め会釈した。彼らは一瞬狐につままれたような顔をし―その後すぐ思い直して礼をし、職務の顔に戻った。ギーシュはその様子に内心で苦笑しながら、ホールに入場した。

光の向こう、目に飛び込んできたホールの様子はまさに百花繚乱。王侯貴族の権力を象徴するかのようなバロック様式で作られた通称「水の間」は、その中心部に鎮座する噴水が特徴的な、まさに上流階級に相応しい大ホールであった。今のアンリエッタ王女の意向により、内装は現在は質素儉約を旨としていると聞いていたが、そんな様子は―少なくともギーシュの眼には―どこにも見て取ることが出来なかった。これで儉約なら去る時代はもつと豪華絢爛だったのだろうか。

その高い天井から眼を降ろすと、数々の士官、貴族（おそらくは士官の親類。貴族の次男坊、三男坊は大抵士官になるしか道は無い）、貴婦人らが豪華な料理の置かれたテーブルの周りで談笑し、噴水の周りではワルツのリズムに合わせて踊っているのが見えた。

―国内がこうも荒れているというのにこんな事をするだけの蓄えはあるんだな…。

ギーシュは、これだけの華美な建築、これだけの豪勢な宴会を成す為に、どれほど平民の血税が使われているのだろうと考えた。

このバロック様式とよばれる建築様式はブリミル教の総本山たる口マリアが、新教徒の勢力拡大で失った権威を芸術活動で取り戻そうとした考えに基づいて生まれたものであり、それは豪華絢爛、グロテスクなまでの装飾過多を旨とするもので、この様式を支えるためには莫大な費用が要求された事。そのため、本来ならガリアやロマリアなどの大国でしか維持しえない物であったが、トリステインの王候貴族が見栄のためだけにこれらの豪華な祝宴会場を整備したなどという事はギーシュは知らなかった。

それでも、ギーシュはここにいる皆がこうして、数多くの「人間の犠牲に基づいて造られた祝宴会場でさも当然のように食べ、飲み、踊り、談笑する姿に強烈な違和感を覚えた。

以前のギーシュならば、こんな事は考えもしなかっただろう。平民の事など空気と同等としか思っていなかったし、それが高貴なる貴族の常識だと思っていた。平民は貴族に仕え導かれるためだけに生まれてきたのであり、その差は魔法の有無によって明らかであり、しかるに貴族はその生まれのみで平民を従える権利があると本気で考えていた。今までそういう教育を受け、そういう社会で生まれ育ってきたのであるから当然ではあった。ギーシュの知る平民とは常に、彼にひれ伏す家や学院の使用人や、自分の姿を見ると恐縮して従う農民や町の住人だけであった。ギーシュは、彼らを通して国のハルケギニアの平民像を見ていたのだ。彼らが貴族と同様、多種多様な価値観を持った人達であるなどとは想像すらしていなかった。

それがなぜここまで考え方が変わってしまったのだろうか。

それは2カ月前、まだトリステイン魔法学院にギーシュが在籍していた頃に遡る。

ギーシュは、ある平民に決闘を申し込み、そして負けた。

その平民は自らを「平民が自ら自由と平等と権利と国を手に入れた」異世界から来た人間と称していて、ギーシュはそんな世界がある訳が無いと思っていた。何故なら、そのためには平民が（おこがましい事だが）貴族を倒さねばならず、しかし平民は魔法を使えないので、どうやっても平民が貴族に勝つ事など出来る訳が無いからだ。ギーシュは彼の事を、彼を召喚した」と称する「ルイズ嬢が連れてきた頭のおかしい平民だと考えていた。

しかし彼との決闘で、ギーシュはその考えが必ずしも正しくないという事を悟った。

ギーシュが魔法も使って全力を出したにも関わらず、その平民はギーシュをあっさりと倒してしまったからだ。

その時からギーシュは初めて彼を平民ではなく一人の「人間」として見るようになった。それはギーシュの人生の中で初めての事だった。彼は今までギーシュが出会った、自分に恐縮する平民のどれとも当てはまらない人物だった。そして彼の行動と価値観を見ていると、あまりにもハルケギニアの常識とは違いすぎて、もしかすると彼の言っていた事は本当かもしれない。彼の世界には貴族と平民という階級による区別が存在しない。

するともしかしたら、本質的には貴族と平民に生まれついでに差など無いのではないだろうか？そう考えるようになっていった。

一人の平民をそう見てしまうと、あとはドミノ倒しのようであった。

まず今まで空気として、貴族である自分達に従うのが存在の全てだとして扱っていた学院の使用人たちが気になって仕方が無くなった。

もしかしたら彼らにも彼らなりの価値観があるのではなからうか？  
ギーシュは、それを説明すべく、使用人たちに片っ端から今までの経歴やら今思っていることなどを聞いて回った。その事で、学友から変なうわさが立てられても、一向に構わなかった。

するとどうだろうか。本当だった。

彼らが考えている事に一つとして同じものは無かったし、ある人間は嫌々ながら仕えていたり、ある人間は仕事が楽しいから、ある人間は…、など、貴族に仕える「理由」も千差万別だった。ギーシュは、今まで平民が貴族に仕えるのは無条件でそういう「生き物」だからだと思っていた。しかし、彼らは紛れもない自分達と同じ「人間」であつたのだ。

これはギーシュにとつてはもの凄い大発見だった。まさに天地がひっくり返るようだった。だとすると、今まで僕は何をやってきたのだろう。僕が彼らに対してやってきた事は「もの凄く失礼だった」のではないだろうか？ いや、それどころか一人の人間の尊厳を踏みにじるような下劣な行為だったのではないだろうか？

そうすると、僕ら貴族の何と矮小な事か！これだけの「人間」達に支えられながら、僕たちは彼らに対して何の対価も与えていない。それどころか、彼らから様々な物を収奪している癖に、それがさも当然のように振舞っている。貴族が貴族たる所以の「高貴なるものの使命」など本当の意味では何一つ行われていない。自分達が行っている事の免罪符に利用しているだけではないか！

そう考えると、ギーシュのこれまでの人生や、学院生活がものすごく陳腐なものに思えてきた。

ギーシュはこれらの考えを分かってくれると思った、親しい友人に吐露したが、彼は何か気持悪い物でも見るような顔でギーシュを

見て、去っていった。そしてそれは、どの学友でも同じ反応だった。ギーシュは落胆した。誰も僕の考えを理解してくれないのか……やはりこういう考えは今の社会では受け入れられないのだろうか。

そしてギーシュは周りとは孤立しないように、この新しい発見をとりあえず自分の中だけに秘めておく事を決めた。

しかし一回変わった価値観は余程の事が無い限り変わらない。ギーシュの新しい発見がヒラガ・サイトとの決闘の中でしか見いだせなかったように。

そしてギーシュが周囲と自分の価値観の違いに違和感を感じながら学院生活を送っていた時、それは起こった。

ラ・ヴァリエール嬢撃たれる――

ギーシュはそれを現場で見ていた者の一人だった。

もともと、同学年のルイズについては、ギーシュはそれほど良い感情を持っていなかった。当初は、魔法も使えない癖に家柄を笠に着たような高慢な態度が気に食わなかった。もともと、彼女も複雑な心境を持っており、魔法を使うための努力をしている事はギーシュも認めていたが、その態度が全てを台無しにしていた。

そして、「新しい発見」の後は、自分を変えてくれたヒラガ・サイトを召喚した事は感謝していたものの、今度は平民だからという今聞けば空恐ろしい理由でヒラガ・サイトを虐待していた事が気に食わなくなっていた。

その時も、彼女は「しつけ」と称してヒラガ・サイトを鞭で何回も殴りつけており、周りの学友が関与しないようにしているなか、ギーシュはついに我慢ならなくなり、彼女に注意しようとした――その矢先であった。

乾いた、それでいて鼓膜を直接打つかのような圧力を持った大き

な音が連続して響き、目の前のルイズがまるで糸が切れた操り人形のように崩折れた。

…、いったい何が起こった？

なぜ彼女は倒れた？

なぜ彼女の身体に穴があいている？

なぜ彼女の周りには血だまりができている？

そこまで見て、彼女の身に何が起こったのかを理解すると、先程  
クラスメイト  
まで学友の一員だった彼女の身体が、傷が、血だまりが急に現実的な物に思えてきて、そして―ギーシュは胃の内容物を嘔吐し、その場に倒れた…。

後に分かった事であるが、「大異変」後に急に現れた国際連合という、海の向こうからやってきた平民だけの国家（！）の連合組織とやらがトリステイン魔法学校を視察している時に、ルイズが誤ってその失敗魔法で視察団を誤爆、それに対する応戦としてルイズが瀕死の重傷を負ったという事であった。ルイズは水メイジの懸命な治療もあって現在経過は良好だが、使い魔を失ったショックは大きいらしく、しきりにヒラガ・サイトの名を呟いているそうだ（そんなに大事なら虐待などしなければ良いものを）。

そして、そのヒラガ・サイトはというと…どうやらその視察団に保護され、連れ去られたようだった。

ギーシュは彼らが無事だったことに安堵したが、周りの学友はそんな事はどうでもいい事のようにだった。むしろ、「平民」がヴァリエール家という「貴族」を傷つけた、という事の方がよほど重要らしかった。

誰もルイズの事なんか内心では「いい気味だ」と思っている癖に、「貴族」としてのプライドだけは一人前のようだった。

ギーシュは、そういう学友を内心で醒めた目で見ながらも、いつも通りの付き合いをしていた。

そして、ギーシュがその後の経過を見ていると、この情報は口伝で伝わっていくうちに、

平民たるヒラガ・サイトがヴァリエール家三女のルイズ嬢の言う事を聞かず、逃げ出したところをルイズ嬢がしつけていたが、それを目撃した平民だけの国家の「視察団」が殺害しようとした。

という、自分達に都合のいい所だけを取り出したものに変質していた事が分かった。この情報を聞いた国内の社交界は平民の国家に対して激怒し、そして、同じようにそれを聞いたヴァリエール公爵が激怒しルイズを家に連れ戻し、兵を集め出すと、今度はその情報が「ヴァリエール公爵が平民だけの国を誅すために兵を集めたらしい」というものになっていった。

ギーシュはこれに心底驚いた。ギーシュ自身は既に平民に対して何の先入観も持っていないし、貴族たる理由が無い貴族については何をかいわんやであったため、こんなものは風評だと内心で反吐が出る思いであったが、ギーシュの周囲は違った。

彼らにとつては、平民が後か先かなんてのはどうでも良く、平民が貴族に反抗した、という一点だけが許せないのだ。そして、ルイズ嬢を傷つけた平民の国はそれにも関わらず何の罰も受けず、のうと現在も存在している。こんな事が許されていいのだろうか？それは、彼らの常識、価値観ではあり得ない事だった。

そしてその雰囲気はいつしかトリステイン国内の社交界に疫病の

ように広まり、ある一つのうねりとなった。曰く、

「罪を償わぬ野蛮な平民の国に罰を与えよ！」

即ち、戦争であった。

そしてギーシュは、現在ここにいる。戦時徴集の貴族士官として、この「水の間」の祝宴会場に立っている。

あの時からの周囲との強烈な違和感は、もはや抑えようがない。周囲の「平民」を知るたびに、そして「貴族」が実は何者なのかを見るたびに、それは大きくなっていった。士官となって学院から出れば何か変わるのではないかと思っただが、結局何も変わらなかった。

ギーシュの周りは、彼からしてみれば、自己の精神の安定のため自分より下の「平民」という階級を作り、それを蔑む事で自分の位置を確保し、安堵している馬鹿者にしか見えなかった。

だが、ギーシュはトリステインを完全に見放している訳では無かった。むしろギーシュは、生まれ育ったこのトリステインには、それなりの愛着を持っていたし、この国に尽くしたいとも考えていた。今は、士官としての職務を全うするだけだ…。

ギーシュは、周りとの違和感を感じながらも、ホールに向け第一歩を踏みしめた。

トリステイン戦争開始前の、およそ二か月前のことであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9772p/>

---

ヴィーヴァ・ハルケギニア

2011年3月2日13時25分発行